

海運から商社へ、壮烈な最期

岩崎弥太郎③

一龍斎貞花

講談師

商社へと発展した三菱商会は、当時数少ないエリートの大卒の他、外国人も採用、社員全員和服に角帯前垂れ掛け。「お客様を大事に」という精神が世間の好感を得て、三菱の信用を築き上げていきます。ある時重役の近藤が、同じ重役の豊川から「この荷物を故郷の土佐へ送ってくれ」と頼まれ、重役のよしみで無料で送ったところ、あとで岩崎がそれを知ると「重役だからといって公私混同するとは何事だ、罰として給料20円を5円に下げる」経費を無駄にしたり、私物化など公私混同を許さず、堅実な経営を徹底。

強大な英国汽船会社と対決

東洋の貿易を担う英国の汽船会社P&O社が、大阪の荷物問屋組合と貨物を一手に引き受ける特約を結んで、大阪－東京航路に進出、相手は強敵。重役達の給与

減額の申し出を受け、「私も給料を半減、重役も½カットする」さればと社員も一丸となり、政府も「もし負けるようなことあれば、国の危機になるやもしれない。相手は大英帝国だ」と政府の支援もあり三菱は危機を脱出、かくして次々と外国航路を開き、更に明治10年西南戦争の軍事輸送を請負い、122万円という膨大な利益を得、この輸送の恩賞でまたまた汽船を下賜され、汽船の総トン数全国の70%強をしめ確固たる地位を確立。政治をうまく利用したことから政商という人もいますが、政府出資の会社が断った台湾軍事輸送を「お国のため」と決断したことが、大隈大臣の信頼を得たのです。いくら接待したって実行が伴わなければいけない。

俵の久弥には、借家住いをさせ、贅沢な暮らしはさせず帝王教育をきちんと行った。企業存続のために後継者教育は重要。

存亡の危機、戦陣の中死去

西郷従道農商大臣が、新たな汽船会社設立を上申、政府が260万円援助し、渋沢栄一、益田孝、雨宮敬次郎、大倉喜八郎、川崎正蔵ら三井系や関西財界の大物から資本を募り600万円の巨額資本をもとに三つの会社を合併させた共同運輸会社設立。株式組織なれど社長は海軍少将、副社長は海軍大佐。非常の際には海軍商船隊として働くという日本海軍の一組織。

三菱が力を持ち過ぎたことへの反発もあったが、一番の原因は政権争いによるものでした。

政府は三菱の重要な航路に共同運輸を進出させる。弥太郎は今度も徹底した経費削減とお客へのサービス、大幅な運賃の値下げ。されど相手も運賃を下げる値引き合戦。今の牛井の値引き合戦とはスケールが違います。船が同じ時刻に同じ港を出て目的地が同じ場合、両社はスピードを競い合い、汽船の煙突は、煙ならぬ火柱を上げるほど加熱、すれ違う時はどちらもゆずらない。遂には共同運輸の船が、三菱の船にぶつけるといふ衝突事故も発生。三菱の海運収益は3年前に比べ半減。共同運輸の方は目標を大幅に割り株式の配当に苦慮する有様。反三菱の西郷や品川弥次郎は、「配当ができんでは政府の威信にかかわる、政府より融資すべきだ」これに対し太政官書記官土方久元（後に元老院議員）は、「ともに国内の会社、共倒れすれば英米の会社がここぞと進出してくる。むしろ合併させるべきだ」西郷は薩摩、品川は長州、土方は土佐。薩長同盟対土佐の構図です。断固戦う姿勢の岩崎は、政府から無償で借りていた30隻の50年賦返済約束を完済するなど徹底抗戦。

しかし毎晩浴びるように飲んだ酒が胃をむしばみ、共同海運との戦いのストレスも大きかったのでしょう。明治17年9月伊豆山で長期療養、だが負けてなるも

のかと社員の止めるも聞かず10月東京へ戻るや、病状は悪化の一途をたどり、名医達の治療もいかんともしがたくガンは進行。胃を突き刺されるような激痛に七転八倒、明治18年2月7日、にわかに変調をきたし息絶えたが、医師が何度も劇薬を注射し気付け薬を鼻に近づけると再び息を吹き返した、すごい生命力です。皆を呼び集め「泣くな！ 弥之助あとを頼むぞ、俵の久弥を後見してくれよ、頼んだぞ」堂々と遺言をするや壮烈な最期、正に戦国の猛将が戦陣の中で無念の死去、波乱に富んだ52年の生涯でありました。

2年以上続いていた戦いに政府も動揺、競争中止を勧告。正にマッチポンプです。

後を受けた弟弥之助は、「2千人以上の社員、1万数千人のその家族、そして取引先のためにも、三菱の旗印を捨てても合併によって生き残らなければいけない」遂にトップ会談によって合併し日本郵船会社となったのでございます。

三菱商会の本体である海運業がなくなり、弥之助は改めて、鉱山、水道、炭坑、造船、銀行の5つの事業を基とする新会社三菱社設立、この三菱社がその後の三菱財閥へと発展していったのでございます。

大河ドラマでは、あのうす汚れた姿からいかな展開を致しますか。

貧しい地下浪人から身を起し、苦難の時代を生き抜き、商人精神を貫き、近代日本経済の礎を築きました岩崎弥太郎伝の一席。